飛耳長目〈第 21 回〉開催概要

日　時	令和6年 6 月 25 日(火) 午後 1 時 30 分～午後 3 時
場　所	安曇野市役所3階 共用会議室307
テーマ	安曇野市での農家民宿事業の展開について
参加者	安曇野市農家民宿連絡協議会　12 名

参加者　安曇野市農家民宿連絡協議会は、市農政課を事務局として平成 27 年 4 月に設立した。現在、市内の農家 57 軒が登録し、農家民宿を受け入れている。豊かな自然環境や伝統文化を生かした滞在型農業体験を推進するとともに、登録農家の連携を図っている。受け入れは都市部に住む学生の教育旅行が中心だが、中国や台湾をはじめとした海外からの利用もある。令和元年度は 17 団体を受け入れ、月 3～4 回のペースで実施していた。コロナで休止していたが、今年度から宿泊を伴う受け入れを再開している。

農家民宿で感じている魅力

参加者　子どもたちと過ごせることが魅力。帰り際、涙してくれる子どももいる。現在は、県外の子どもたちを受け入れているが、市内の子どもたちにもこの体験を味わってほしい。

参加者　お金より元気をもらう喜びの方が大きい。今年の 3 月には、コロナ前に利用した子どもから手紙をもらった。コロナで受け入れの意欲が下がっていたが、手紙で元気をもらい続けられている。受け入れ時には農業だけでなく、市内の観光名所も案内して安曇野のよさを伝えている。

参加者　利用した子どもの保護者から、感謝の電話をもらい交流が続くこともある。受け入れた大学生があづみ野エフエムで農家民宿のよさを話してくれたこともあった。こうした出来事が力になっている。地域も体験に来た人を温かく迎えてくれる。

参加者　今年度初めて中学生を受け入れた。今の子どもたちは、親や先生以外の大人と触れ合う機会が少ない。私も元気をもらい、お互い心の中で足りなかったものを補い合うことができた。

協議会の現状と課題

参加者　コロナ前は松川村も農家民宿を行っており、合同で受け入れをしていた。登録農家も 70 軒ほどあったが、コロナ後は登録が減少し、利用依頼があっても断ることがあった。コロナで受け入れを休止したことで、私たちのモチベーション維持も難しくなり、事業が縮小している。

市長　　農家民宿はどのように周知しているのか。教育旅行の場合、学校から直接依頼があるのか。また、どの地域からの利用が多いのか。

参加者　　希望があった際に受け入れしている。教育旅行の場合は、旅行会社を通じて受け入れている状態。すべての登録農家が農家民宿の許可を取っているため、宿泊業者として一般の宿泊も受けることができる。地域は、東京都や千葉県、大阪府からが多い。修学旅行として農家民宿を利用することもある。

参加者　　農業の経験はなかったが、両親が亡くなり土地と家が残ったため、空き地と空き家対策になればと農家民宿を始めた。安曇野ハーフマラソン前日の利用など、スポーツと農家民宿の可能性を探っている。農林水産省では「農泊インバウンド受入促進重点地域」を選定し、県内では南木曽町と佐久市が選ばれている。

市長　　市議会の６月定例会に台湾へプロモーションを行うための補正予算を計上している。予算が通れば、現地の学校や旅行会社を回り、ＰＲしたい。海外から教育旅行で安曇野市を訪れることがあるが、市内に宿泊していないため、宿泊につながる取り組みをしたい。教育旅行は記憶に残り、再来訪につながる。安曇野ハーフマラソンは昨年度から前日にイベントを行い、宿泊を促している。今後に向けて、マラソン終了後にも滞在してもらう方法を考えている。せっかくの機会なので市内に 2～3 泊してもらいたい。市内には宿泊できる場所が少なく、大きなイベントや会議の開催が難しい。東京にある県のアンテナショップ「銀座ＮＡＧＡＮＯ」で移住促進のイベントを行っているが、そこで農家民宿のＰＲをしてもよい。

今後力を入れたい取り組み

参加者　　これまでは教育旅行が中心で、時々海外の方を受け入れていたが、協議会でもっと受け入れたいという思いが高まっている。特に市内の子どもたちに利用してもらいたい。

参加者　　市内のアパートに住む家族にジャムづくり体験をしてもらったところ、とても楽しんでもらえた。市内の子どもが利用するのであれば人数を限定して募集し、先着順で受け入れしたい。

参加者　　市内の子どもたちにも、自分のまちの水や農作物のおいしさ、また汗を流す楽しさを体験する機会をつくってほしい。学校登山など学校で一斉に自然に親しむ機会はあるが、こうした体験を苦手に思っている子どもは負担になることもある。農家民宿は、希望者を募る形にすれば個々の好きなことを伸ばしていける。農家民宿のよいところは対価をもらい、責任を持ってやっている点。宿泊を再開したが、受け入れ回数が伸びていない。農業も忙しいため、安定した受け入れがないと続けることが難しい。市内の子どもが利用してくれると回数も伸び、意欲的に取り組む農家が増える。さらに、市から資金面の支援があると継続性も高まる。

参加者　農家民宿の見学依頼があるが、農業が忙しくお断りすることがある。対応できるよい仕組みがあればそちらを案内できる。イベントで民宿の限定公開をしているが、こうした機会を増やしたい。

参加者　少人数しか宿泊できない農家民宿だからこそ、農業をベースにした展開ができると思う。

参加者　安曇野市にはＵターン移住してきた。森のようちえんが注目されるなど、以前から自然と触れ合える場所で子育てをしたいと考える人は多かったが、コロナを経てこの動きが加速している。安曇野市は、農業や自然に触れられる環境がある。一度は市外に出ても子育てを機に戻ってきたいと思えるまちであれば、メリットになる。

市長　事務局が登録農家で体験できるメニューをまとめ、ＰＲできるとよい。市の人口は、９年連続で社会増となっている。自然減はあるものの、昨年は県内トップとなる 355 人の社会増となった。うち 200 人は 0～14 歳と 30～40 歳代で、子育て世帯の社会増が増えている。非常によい状態なので、伸ばしていきたい。

参加者　農家民宿を利用する人の関心は農業や観光、移住など、さまざま。要望に応える環境を整えなければならない。ニーズに応えればリピーターも増える。

参加者　市内の中学校で伝統野菜の授業をしているが、地域の風習や伝統行事を知らない中学生は多い。

市長　市内外問わず、子どもたちが地域独自の行事や風習を知る機会は少なくなっている。農家民宿は、必ず農家体験をしなければならない定義があるのか。農家民宿の長所はオーナーである皆さんと話せるところでもあるので、体験メニューに三九郎や七夕まんじゅうづくりなど、地域の行事を取り入れてもよい。

市担当者　農業体験や地域の伝承に関わることを行うことが農家民宿の許可要件となっている。

参加者　学校を通じて市内の子どもに農家民宿を周知することは可能か。現在の宿泊料金は、食事や送迎、体験付きで１泊 9,350 円。特別な体験ができてこの料金だと、価値を下げているように感じる。

市担当者　料金は教育旅行を目安に、協議会の総会で決めている。各校の取り組みとしては、地域や農業について学ぶ時間を設けている。学校への周知は、校長会を通してお願いをすることになる。

市長　　市内の子どもの受け入れについては、まずは周知して宿泊してもらうとよい。料金の補助は、その状況を見てからになる。農業をしている家庭もあり、どれくらいのニーズがあるのか明らかにする必要がある。市としても、広報紙やホームページで周知できる。

参加者　　子育て世代は、子どもに対する市の取り組みや学校の特色をシビアに確認する人が多い。それを考慮すると、農家民宿はそういったことへの意識の高い人たちが利用すると思う。市が料金を補助することは難しいとのことだが、私たちと市が連携して一緒に考えていくのは有意義なこと。

参加者　　私たちも質の高い宿泊や体験を提供して見合った対価をもらい、農家民宿の価値を高めることが必要。このような体験は、経済的な理由によって差が出ることは望ましくない。私たちも料金に関わらず受け入れしたいが、経営上難しい部分もある。そのギャップを解消する仕組みが将来的には必要だ。

参加者　　農家民宿は付加価値がある事業。希望があれば、家庭の事情に関わらず利用してもらいたいし、市の協力があるとありがたい。安さではなく質の高さを周知すると付加価値は上がっていく。

参加者　　市内の子どもには農業ではなく、人の家に泊まるというアプローチで周知した方がよい。

参加者　　今年の夏休みは、受け入れできる農家で定員を決めて募集することもできる。今後の方向性を協議会で話し合いたい。

市長　　今回いただいた意見で市が対応できることは、事務局を通じて取り組んでいく。他の宿泊施設と競合する必要はないが、農家民宿という別の世界があることを周知することが大切。農業と観光は関連するところがあるので、考慮したい。